

# 米山梅吉記念館 館報

2006  
(平成18年)

春

Vol. 7



## 記念館屋上からの富士山

山頂に雪を頂いた富士山は、古今東西時代を越えて日本人はもちろん世界の人々に愛される風景になっています。この象徴的な雄姿が実際にはっきり見える日は冬場の早朝、年間20日足らずといわれています。記念館のある第2620地区(静岡・山梨)の私たちは幸いにもこの富士山の懐に抱かれて日々生活しています。現在、富士山を世界遺産に、という運動も盛んに論議されています。

当館屋上からは上掲写真のような富士山を仰ぎ見ることができます。ご来館の折にはぜひ屋上まで足を伸ばしていただき、この清々しい風景をご覧いただきたいと思います。

富士山と共にみなさまのお越しをお待ちしております。



財団法人 米山梅吉記念館

## 館報第7号発行に際して

理事長 内藤成雄



全国のロータリーアンの皆様、米山梅吉記念館では、歳んで年間のご支援を感謝し本年のご挨拶を申し上げます。

今年は昔情の乱れに加えて天候まで厳寒、北陸、東北の大雪等ただならぬ状態が続きありますが、如何にお過ごしですか、その地域の皆様にはさぞかし大変のことと存じます。

米山梅吉記念館もおかげさまで順調な運営を続けております。全国的な規模で会員が減少する状況にもかかわらず、館において移動例会を行うクラブも増え朝来館者数は前年より増えています。

平成17年度の館創立35周年行事を終り、秋の例祭では「還ろう 米山梅吉の原点に」と題して特別のシンポジウムを開きました。パネリストに米山記念奨学会の宮崎専務理事と谷内監事、坂本館顧問をお願いしました。本号にその内容は載せてありますので御覧下さいたいのですが、昨今ロータリー界にただよう何とない行きづまり、曲り角、マンネリ感に對して「困った時には原点に還ろう。ロータリーなら米山精神に還ろう。」を意図したものでした。米山記念奨学会も規模、目的を超えて御協力を限り申味の濃いシンポジウムになったと思っております。この結果が同じ感を得たいと全国のロータリーアンの間、題点の解決の一助になれば幸いです。

私の文学というより人生観の師匠に故新田次郎先生がおります。そのご二男藤原正彦さんがこの館『国家の品格』という本を書いて贈ってくれました。この父にしてこの子あり、誠に同様の語が萌え、鼓舞され、本当に日本がこの通りになったなら、日本は救われるだろうと思っております。経済改革の柱となった市場原理のみがまかり通る日本、論理と合理ですべてを片付け、風潮に身を売った日本、改革すべてが改善と曲違ひする政治、社会、文化、全方面での意識低下、金銭至上主義にとりつかれ、マネーゲー

ムとして財力にまかせた法律違反すれすれ（実際に胆を挫かしてしまつた）のメチャクチャ買収を専らとも下品とも思わなくなつた日本、祖国への誇りや自信を失うように教育され、すっかり足腰の弱つてしまつた日本、このように品格を失つた国家を救うのは世界に誇る我が國古来の「情」と形。を取り戻すことだ、と正彦氏は訴えています。さらにこの本の基本には新藤戸稲造の「武士道」精神が充ちみちております。この精神は慈悲、誠実、忍耐、正義、勇気、惻隱、名譽を重んじ恥を知る心、「ものあわれ」を知る情緒に要約されます。幸いこの本がベストセラーになつていくさうで、この考えに共鳴の方が多いためにはあかしと喜んでおります。館報のたまりにはあさわしくなくないようですが、私はこの考えは米山梅吉精神とも一如に繋がっていると思ひ、館発行の『超我の人 米山梅吉の遺言』資料編の米山語録にもこの考えは随所に見ることができまう。今ロータリーが原点に還るということはもういうことではないかと考えられます。

館の目的は米山梅吉の遺言を継ぐことです。その一つに米山翁の三井報恩会の業績があります。大変大きな遺言です。来る4月の例祭にはその面をすこし刻削しようと思ひしております。講師は三井報恩会のことにも最もくわしい谷内安文氏をお願いいたしました。この機会に多くの皆様にご参加いただき、更に情報を頂くようお願いいたします。

おかげさまで願望とは申せ館運営はすべて全国のロータリーアンの善意の御寄附によつております。基本的な資金の外に賛助会費、全国への年間1人100円募金運動、周年行事ご寄附等にたよらざるを得ないのが現状です。厳しい冬が終り館の春は近いのです。何卒館への移動例会を含む企画をおたてになり御来館をお待ちしております。

# 創立記念祭

内藤成雄 理事長

米山奨学会理事長 島津久厚 氏

- 日時 2005年9月17日(土)
- 会場 朝米山梅吉記念館ホール

- 例祭及び幕幕
- 特別シンポジウム

## 「還ろう 米山梅吉の原点に」

- パネラー

朝ロータリー米山記念奨学会  
専務理事 宮崎 幸雄 氏

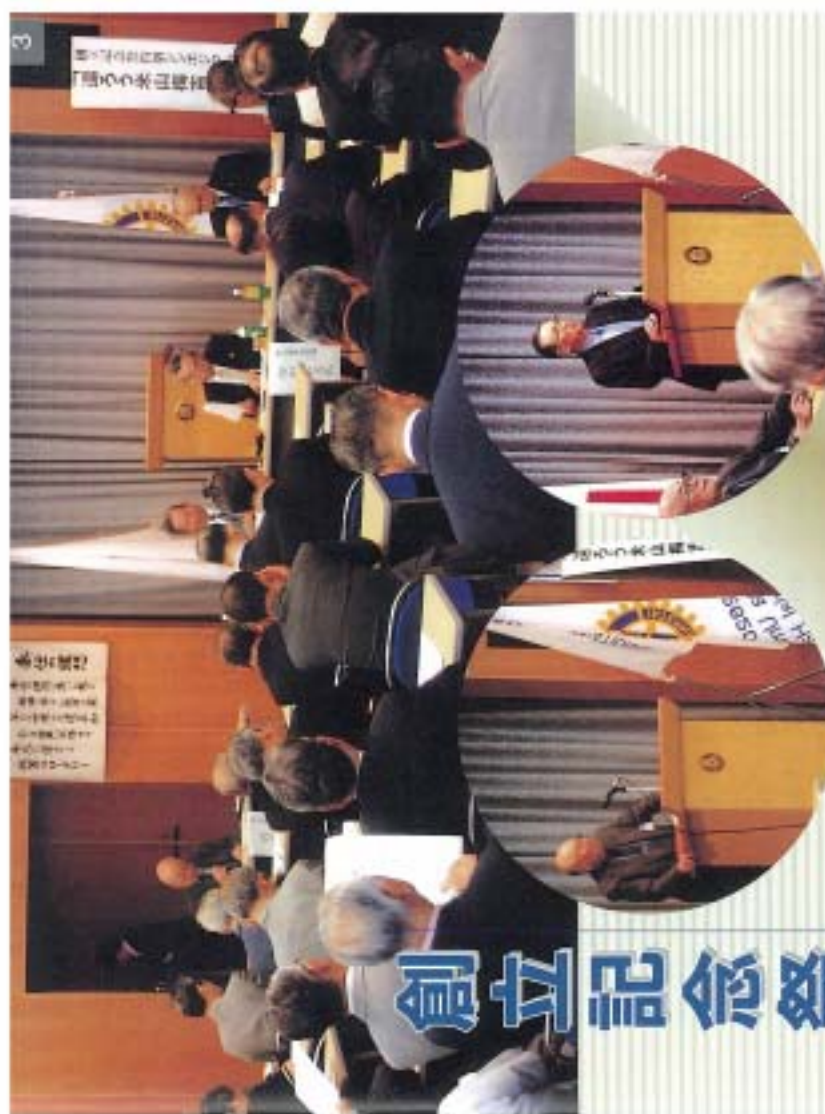
朝ロータリー米山記念奨学会  
監事 谷内 安文 氏  
(元三井報恩会副会長)

朝米山梅吉記念館  
顧問 坂本 豊美 氏

- コーディネーター  
朝米山梅吉記念館  
理事長 内藤 成雄

- アトラクション  
音楽会 オーボエ：中村 多恵さん  
ピアノ：丸尾真紀子さん  
チェロ：高木 愛子さん

- 観覧金



朝米山梅吉記念館 館長 谷内安文 氏



音楽会 中村多恵さん、丸尾真紀子さん、高木愛子さん





取巻れない取合せである。グラント將軍は、アメリカ南北戦争の時の北軍の將であり、幾多勇名を挙げた。前軍のリー將軍との対陣など、戦後アメリカ国民の間で人気を博し、1869年3月から1877年3月まで2期8年、アメリカ大統領をつとめた。だが、任期満了が近づくとつれ、政權内部の汚職などで多くの批判をうけた。

グラントは、大統領の終った後、1877年(明治10)5月から2年間、世界周遊の旅に出かけた。日本にも、1879年(明治12)6月から2ヶ月半ほど国賓名みの待遇で滞在した。

米山がこのグラントに施された面談をしたことがある。米山は、蘭軍艦を駆逐とする「英海防艦実業団」の一角として、アメリカに渡った。大正11年のことである。10月15日横浜を出発し、10月20日シアトルに着いた。そして、鉄道で東部にかけ、11月4日朝10時にシカゴに着いた。ホテルに着くと、查しくも、首相府臨時の悲報が報込まれた。その日予定のおり日程をこなさし、翌日も、ホテル・プラッツァストンで、朝日の香社のた



1865年頃のグラント將軍 (『グラント將軍日本訪問記』より)

米山梅吉とグラント將軍

35周年記念誌編集委員長  
井口 賢明  
(沼津北RC)

めの日本製油所の晚餐会を行なった。米山は、ここで、グラントの来日が日本国民に多くの感銘を与えたこと、グラントが日本のために助言したり多大な貢献をしたこと、グラントの来日を含め日本の信賴関係は長い間重んじられていること、アサシントン軍艦会議も信賴に基づいて民族全して歓迎などの演説をした(ちなみに、この訪問団は、折からの軍艦会議を刺激から援助するものでもあった)。そのついでに、自分が少年のころ、グラント將軍と出会ったことを話した(『英米訪問實業團誌』日本工業振興部内 十一年會 大正04.25)。

予は「グラント」將軍に就き一つの小さな個人的理想を持つてゐる。それは將軍が帰国直前に入浴せられた折、山向ふの三島と呼ぶ町の町に執出たのにならば、將軍と一緒に他にも紳士が認められたのであるが、十歳の少年は彼等が頭に向けてゐる奇妙なものを初めて見たことである。聞けばそれは「シルク・ハット」といふものであつた。今でも特別の名譽として想ひ起すことは、予が將軍の滞在になられた家で使者として將軍に近づきたる小學兒童の一人であつたといふことで、かゝる貴顕には成る程以上近づき得ることは許されなかつたのであるが、將軍の凡ての人に對する親善な表情、平和な態度は今日でも予の回想にのほり来るのである。

グラントの世界周遊には、夫人、子息のほか、求めに応じてジャーナリストのヤングが書記として同行した。そのヤングによる「グラント將軍の世界周遊記」があり、その日本の部分について、宮永孝賢「グラント將軍日本訪問記」(雄松堂書店 昭和58.02.25 新興図書 第11巻 9)がある。

このなかに「グラント將軍は船根をちよつと訪れ、富士山を取り巻く美談に見入った」という部分がある。グラントは、船根を訪れているのであるが、余り他れしていない。訳者の解説によれば、明治12年8月12日(夏



三島大社前 明治初期  
(『みしま町』昭和15.02.16 三島市郷土資料館より)

京駅から8時半の汽車)で箱根宮ノ下に行き、8月13日も「箱根に滞在したようである。ヤングは箱根で過ごした体験について詳らかにしている。『おそろくグラント一行は数日滞在して帰京したものであろう』とする。

このように、ヤングの書物には、三島に来たことの記事がない。しかし、グラントは、8月16日三島に来て一泊し、翌17日早朝箱根に帰った。三島では、賓客グラントを迎える準備やそれを迎えて、また折から三島大社の祭典とも重なり、てんやわんやの大騒動であった。新聞には「本報(三島朝)開業以来の賑わいならん」とある。

『静岡縣土産研究』(第7輯 昭和11.09.20)に、米山梅吉「グラント將軍の來朝と静岡縣」という論考がある。これは、主に当時の「静岡新聞」からその感銘を記述したものである。静岡県には、他に「兩日新聞」があり、これでも詳しく報道された。この発行は、御殿外という人の影響が強かった。静岡は、始まったばかりの静岡界会の議長(兼静岡新聞学校監事)であり、グラントを静岡県に招待しようとした中心的な人物で、その臺北接待委員であった(富士の郡界村に居住し、静岡県での自由民権運動の指導者)。以下二つの新聞から、グラント来島の様子を要約してみる。

静岡県では、7月2日の水の静岡市訪問について、もう一度グラントを招待しようとした熱心に運動した。その結果、箱根訪問の折、グラントが三島に来ることが決まった。

う竣工を急がせた。グラントは、明治12年8月12日、汽車で新橋を出て、神奈川に着いた。ここからは、人力車である。途中、小田原に一泊し、翌日、箱根宮ノ下に向った。途中からは運搬であった。宮ノ下では、ふじやに逗留した。

当初、8月15日、三島に来る予定であったが、16日となった。このため、作興の三島は大家であった。干配した生の鮎が翌日までもつたりかとか、献上しようとした鮎がむけてしまふとむけてきて舞いであった。

グラントは、16日朝4時30分宮ノ下を駕籠で出発し、箱根で朝食をとった。新田までは、夫人も一緒だったが、それからは、グラントと息子である。午後2時40分、三島の入口川原へ岸に着いた。ここには、三島学校の生徒約400人が出迎えた。グラントは、「流石帽を脱して普説した。ここから、人力車に乗換えた。とりあへず宿泊所の本陣吉太夫太夫方で休憩し、三島大社に参加した。その後、校舎前の三島学校に向い、ここで夕食をとった。料理は、上野精養軒が平配した。

その夜、本陣に宿泊し、翌朝5時過ぎに箱根に向った。今度は、朝馬であった。ちなみに、三島小学校ではグラント来朝にちなんで、朝いようとなく校舎の玄関をグラント玄関と呼んでいた。これは、昭和35年、現在の市役所に建替えられるまであったそうである。



三島小学校校舎 右がグラント玄関 (『みしま町』より)

ところで、記事には、三島小学校の生徒約400人が三島の入口、川原へ岸にグラントを迎えたことが出てくる。しかし、主任代表がグラントに謁見したことの記事はない。米山の演説にいう「將軍の滞在になられ

吉氏非難」(昭13.10.30 日本教育資料刊行会)である。これについては、その巻の資料との関係で整合性を理解できない。何れかの機会に扱われてみたい。



米山梅吉が最初に学問を学んだ新雪舎  
た家が新築された後福清の学校なのか、宿舎となつた古本陣なのか定かでない。

米山の少年時代は多くがわからない。「米山梅吉傳」年表では、明治8年「映雪舎入学と推定」、明治12年「長兄和田宗次郎映雪舎教師として校舎向高住宅に住み和田家転居、映雪舎に於いて学習と助教、長兄村の利山家と養子縁組の話はじまる」、明治14年「福清中学校入学(長兄村米山家より通学)」とある。

すなわち、米山は、兄宗次郎が長兄村の映雪舎で教師をしていた。その間、三島から長兄の納米里という部屋(およそろく)にあった映雪舎に通っていた。その後、宗次郎が校舎向高住宅に住むようになり、一家はそこに移居し、映雪舎を終えた。そんなことか、米山家の日にとまり養子縁組の話となった、ということである。

この点、米山のシカゴにおける演説の内容やダウンが三島にきた状況の記事によれば、グラントが三島にきた明治12年8月には、米山は、長兄の講習会でなく、三島の小学校の生徒だったことになる。これを裏付ける資料に『三島市誌 下巻』(昭44.05.31)がある。これによれば、米山の兄宗次郎は、明治12年には、三島の小学校で教師をつとめていた。

『三島市誌』にあるように、公立三島小学校(小学校)の教師として、教員手続13名のなかに、米山の兄和田宗次郎の名前がみえる。米山も兄が三島の小学校で教師をやろうになり、映雪舎を移って、ここに通りようになったのであろうか。

米山のシカゴにおける演説の内容は、米山の少年時代のことについて、一石を投ずるものである。なお、米山の幼少の頃のことを考えるについて、もう一つ参考とすべきものがある。高木秀男編『米山梅

校舎は三島町の崩年益下げを受けた田圃地の地で、西側を川筋まで拡張して一、七五〇坪となった。校舎は正面二階建て、左右の両端は平屋造りの北面向き切半形である。総延坪数三六八坪で教室一二間、仮教室・教員室・備置室・教員宿舎・小使室を一室を設け、植樹社園なること旗下一と称せられた。竣工費三、三七一円九六銭である。当時校長は吉原守雄で教員助手合わせて一三名、生徒数四八七。明治十二年の校費支出額は金一、四四三円二〇銭五厘である。

当時の教員を挙げると次の如くである。なお吉原守雄は明治十一年五月に校長に任命されている。

明治十二年公立三島小学校教員												
校長	吉原	守雄	月俸	七円五〇	副校長	青木	不動	五円	司書	伊達	盛雄	三円
教員	長江	八	三	五〇	教員	大田	藤次	五円	司書	和田	宗次郎	三円
三島	西合	八	四	〇	司書	菅野	美次郎	五円	司書	伊達	盛雄	三円
校舎	よ	三	七	〇	司書	木村	つる	五円	司書	伊達	盛雄	三円

『三島市誌』下巻より

# 和田家のお墓と米山梅吉翁の生誕地

市居 嘉雄 (西宮RC)



米山梅吉先生は私にとって学部は異なるものの、慶應義塾大学新聞研究室主任教授としてご指導いただいた恩師です。しかし、私が西宮RCに入会した昭和55年には先生は前年に亡くなっており、先生が梅吉翁の三男であることも東京南RCの会長をされたことなども存じませんでした。そうしたことなどについて、私は米山奨学会の事業や梅吉翁のことなどについて関心がありました。

梅吉翁は若い頃、和田家から米山家へ婿養子に入つた方です。実父和田竹造さんは大和国高取藩の江戸藩の武士でしたが、明治5年(1872)7月12日高取町で亡くなって、同町大字下土佐にある光明寺の墓地に埋葬された。と『伝記』の年表にあります。

それで、私は平成3年(1991)のお盆に行ってみました。近鉄南大阪線で履原神宮前から三つ目の高取山駅で下車、6〜7分程歩いたところに立派な光明寺がありました。

墓地は小高い所に段が古い墓が、平地には新しい墓が広がっています。古い墓は昔むして刻まれた文字が殆ど判読できません。ちやうど和歌前住の住職が通られたので尋ねますと、以前にもロータリー関係の方が来られたが、この寺は浄土宗で檀家の中に和田姓は無く、該当するよりな墓は知らぬとのことでした。しかも、十何年ほど前に黒縁蓋を覆ったので、成いはその中に含まれていたかも知れないという話でした。

そこで電話帳を借りして、高取町内の和田姓の住所と電話番号を書き出し、ここぞと目星をつけた和田姓の方2軒に電話しました。1軒は以前にもロータリーの方から同様のことを尋ねられたことがあつたが、うちは代々和歌前住の和の初めに火事退去、帳が焼けてしまったので昔のことは判らないし、うちには浄土宗と違ひからとのことで、もう1軒も違いました。こういう結果で空しく渡

阪山から引揚げざるを得なかったのです。その後、第28回地区からの「米山詣で」に参加し米山記念館を訪れた際、磯田常務理事に和田家のお墓の件をお尋ねしました。すると翌年になって、磯田氏から「和田家のお墓は、もしかすると米山家のお墓がある鶴見の福寿寺の墓地へ、和田家が米山家の墓方かによって移されたかも知れません」とのお手紙を頂戴しました。鶴見へはまだ行っていません。

次の関心事は梅吉翁の生誕地はどこかということでした。「米山梅吉伝」には明治元年に芝田村町の高取藩江戸藩で生まれたとありますが、残念ながら著者の作家佐々木邦氏の記述では田村屋敷や台田屋敷など周辺の描写が多くて、肝心の場所がはつきりしません。

そこで私は、その江戸屋敷がどこにあったのか、それが現在のどこに当たったかを突きとめてみようと思ひ立ちました。まず、田高取藩の家老後故を探し出したのを手始めに、『江戸藩政要覧』編纂の井上隆明氏(秋田縣大先輩)、新人物往來社や江戸東京博物館などに問い合わせさせていただき、その場で東京町田サビビアRC小島政幸会長が資料を送って下さいました。

その結果、江戸時代末期から明治初期にかけて、高取藩の江戸藩政には上中下の屋敷があり、芝田村町に該当するのは中屋敷で214坪あったこと、そして当時の地名では芝愛宕下、のちに芝田村町6丁目となり、現在は新橋6丁目の一面にあることが判りました。(下図参照)

次に、その中屋敷跡が現在のどこに当たったかを特定する段階で、江戸時代の地図に現在の地図をかぶせた資料類の間には、南北に若干のズレがあるものの、およそその場所が把握できました。

それによりますと、今の「新橋赤レンガ通り」が昔の愛宕下大名小路と



こういふ結果で空しく渡

ており、各藩の屋敷もこちら側に御門があったと思われまふ。連に今「日比谷通り」と稱する以前の都電の通りは、維新前後は真逆の感じで、現在の新橋4丁目交差点から御成門交差点までの450mほどしかなかったのです。これら2つの通りの間に挟まれた東西110m、南北50m余りの区域に高取藩中屋敷があったことが判りました。

私は平成11年(1998)10月に上京した折、前述の小島氏と共に現地へ赴きました。新橋6町目の日比谷通り赤レンガ通りの間には大小のビルと小売店や



## 『超我の人 米山梅吉の聲音』を拜読して

乾 昇 (浜北 RC)

はじめに

昨年、米山梅吉記念館の35周年を記念して、『超我の人 米山梅吉の聲音』が要約された。第1編「米山梅吉その生立ち」と人となり(15頁)、第2編「米山梅吉がどんな人か、そして日本のロータリーがどのようにして生まれたか」が要約されており、もし米山梅吉が、記述されているようなチャレンジャーのようにならなければ、日本のロータリーはどのようなものになっていたかと思ひ、恐ろしさを感じさせられるものがある。翁の生立ちも決して平凡なものでないが、米山翁が如何にロータリーを愛し、如何に日本への導入に没頭していたかを知る事ができた。感想としては述べきれないので、不十分ではあるが要約の形で下記する。

### I. 第1編 生立ちと人となり

①生立ち

翁は明治元年(1868)東京芝田村で、父・大和國高取の藩士の和竹、母・静岡三嶋大社の神官日比谷右京の嫡うたの三男として生まれ、4歳の時、父が死去、まもなく母の郷里に母とともに暮り住む。

11歳の時、上土府の米山家から請われて養子となる。(米山家は今川時代から北条時代を経て400年も続いた名家で、「はる」という一人(後の米山夫人)がいた)7歳から小学校、中学校で真吉(山夫人)がいた)7歳から小学校、中学校で真吉(山夫人)がいた)15歳の時、15歳の時、郷里を離れ、出陣、奥州の江戸学校へ入る。明治18年、東京府

飲食店などが立ち並んでいますが、増番では新橋6丁目14、15、16番に当たり、東西南北に小道が通っているため6区画にまたがっています。(前述の如く資料によっては南北方向に3〜4mのズレがある。)

このように、梅吉翁が産声をあげた高取藩中屋敷や各藩の屋敷が並んでいた仕舞をしのびながら、私は中屋敷跡地の然るべき場所「日本ロータリーの始祖・米山梅吉翁生誕地」の碑(石神かプレート)を、日本のロータリー創設100周年までに設置すべきと強く思った次第です。

吏員の試験に合格、東京英和学校に入學、さらに明治20年即ち福音堂英語学校に入學する。この年、正式に米山家に入籍し、米山姓で半々に渡来、20歳であった。

②渡 米

サンフランシスコの福音堂教会に寄寓、ここでも良き師に巡り会い、且底いなどで学資を稼ぎながら高校からオハイオの大学、ニューヨークの大学で学び、在米8年で、アメリカの知識を持つ家々たる日本の紳士として精進、貴族との確言も復活した。

③三井時代

明治時、自筆「提督使現(ペルリ)の原稿を持つていたが、これを贈海舟のところに持ち込む。海舟は喜び、題字を書いてくれ、財界人藤田四郎は序を書いてくれた。その藤田の口添えで三井銀行に入る。その後、三井信託銀行の社長となり、経済界や教育界で活躍する翁の姿が分りやうやく記述されている。

### II. 第2編 ロータリーとのかわり

①福島藩三次との出会い

米山翁は大正6年(1917)、政府特許財政経済委員として渡米(当時49歳、三井銀行常務)。福島は明治14年生まれで三井物産勤務。大正7年元旦、ダラスの福島の家で2人は邂逅。この時、ダラス・ロータリーの会費であった福島から、ロータリーの話を聞いたのではないかと、米山翁はそれよりも前の大正3年に「新報啓論」を著している。

すでに専任についての体質を著していた翁は福島の話に興味をそそられたのではないだろうか。

②東京ロータリークラブの設立

福島は大正9年(1920)帰国。シカゴのRC国連合会から、東京にRCを創る特別代表を委嘱される。

福島はまだ38歳で、三井物産の副支配人すなわち勤め人だったので、米山翁に実質的な権限を託す。そこで翁は設立委員会を作り、大正9年10月20日、設立総会を開き、シカゴの本部へ報告。大正10年4月1日、東京ロータリークラブ(会員21名)が承認された。翁は、大正9年9月から東京RCの会長となったが、ロータリーに関する知識も乏しく、クラブの発展に苦心したようである。

大正12年の関東大震災に対する国際ロータリーの対応に、東京RCの会員はロータリーに対する認識を大きく改め、例会の出席率を始め良い方向に転じた。

例えば、震災後第3回例会で米山翁は「東京RCの例会が月1回であるのは、RIの理念から見ると重畳である。震災復興の困難な事業に直面した今日、会員はロータリーの大きな目標を達成するため、更に深い友情と義勇を確立する必要がある。これからは毎週1回例会を開くことを提議する。」と語り満場一致の賛成を得た。

③国際ロータリーでの活躍  
米山翁は大正15年(1926)、ペンパの国際大会で、RIの理事に選任された。当時日本には東京、大阪、神戸、名古屋、京都の5クラブしかなく、アジアでは初めてのRI理事だった。

その後、日本、旧満州、朝鮮を合わせて第7回大会が出来、翁は初代ガバナーとなった。京都で建区大会を開いている。昭和4年には2期目のガバナーを務めダラスでの国際大会に出席している。さらに昭和5年、3度目のガバナーに選挙され、苦節の末まもなく受諾した。その後クラブの拡大に注力すると共に、第70回の第4回から6回までの地区大会で特別代表を務めている。

### III. 米山梅吉翁啓論

当時のロータリーが現在のロータリーと異なるのは当然と言えようが、本書は古きを温ね新しきを知るべき最速の書と言える。上記は第1〜2編の内容の要約であるが、もちろん通読すべきである。資料欄には翁の文書などが多く、それぞれ内容は意欲深いものがあり、特に次の3項は翁のロータリー観を表現していると思う。

①第70回地区総議会(昭和13年8月6日)で

の演説の一節 (P.176〜179)

ロータリーは20世紀が21世紀に邁すべき最も貴重な遺産である。得來きならにその進歩と改善を続け行かねばならぬ。(中略)これが即ちロータリーの創立者ポール・ハリスが始終考へておられることであって、茲は大会の度にメッセージに於いて何時も同様な注意を与えている。

②ロータリーと終始するハリスの人格 (P.186)

ハリスは曰ふ「人間肉體上の福祉には第一に食物を必要とする如く、精神上の富裕には最も女人を必要とする」と、此が彼の信念の存するところである。其書其の他種々の方法により他人の思想を模倣することは出来ても、其れは真しく接近せる友人との共鳴に如かざるもので、凡そ有益なる友人は獲難せる社会のあらゆる方面より求めねばならぬ。是れ即ち趣味の問題に亦して、人間の向上、社会の改善のために最も重要な条件なりとするのである。ロータリーの出発点は真に此に在るので、ハリスは故々としてこの理想の發揮に力め其の運動方法を講及することを怠らなかつた。ロータリーの信奉する主義は古今東西に亘る共通の真理である。之れを現代に適用せしめて之れが活動を効果的のものとなすためには、多数の人の協力が必須である。而してロータリーが其の基礎を其業及び専門職業人に置き、会員の職業別と出席率に重きを置くの組織は、確かにロータリーを成功に導くものと信ずるのである。

③S.A.A.について (米山梅吉ガバナー通信より) (P.205左端)

サージェント・アット・アームズについて一言。東京クラブにては茲れに警備總監など呼び候こともあり、お日付けとも申すべく、世話人とも申すべく、或は又大きく言えば議会の院内総務にも当り、我々中は司会者に次ぎ議会の規律を保つために重大なる権限を付与され居るもの、その内特に希望され候は欠部者、選擧者等に注意してセクレタリーの仕事を助けると共に何処にもある。会員中別働隊の中にてあるチームを占領すること、善を構め、或るチームに一村が出来る様なことをなすべきに於ては、

おわりに

全巻366頁をわずかに400字足らずに圧縮することは不可能で、誠に不遜なこととは思つたが、この素晴らしい『米山梅吉の聲音』が多くのロータリアンに親しまれる一助となればと譯かましくも拙文を認めた。次札の貌お許し頂きたく存じます。平身低頭。

## 館展示の米山翁の書解説



昭和13年

秋の老翁石川翁の田舎を歩む

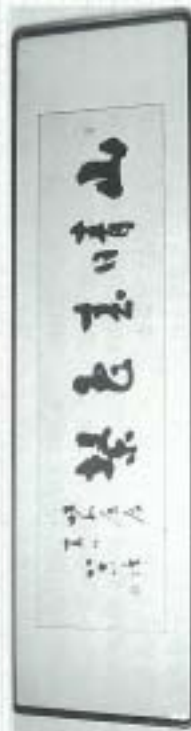
天地のめぐみは程にあまりありたくはせずと夫人は判り

石川翁の書と太野翁より故郷が用ひし杖一ちとを得ず

わがものと今日よりわがもの故に老翁がふみしあと進ぶよしもがな

明治の二宮尊徳と称された石川理起之助は、被解していた故郷秋田の農村経済に心血を注ぎその復興発展に尽力した。三井相懇会はこの石川の業績を称え、「石川翁農道要義」という論文を出版した。石川の残した莫大な量の蔵書、研究書は三井文庫という形で当地に保存されている。昔も一首の短歌は、米山が秋田に石川翁の足跡を訪ねた折りに詠んだ歌である。

石川理起之助 (1845～1915)  
 (『石川翁農道要義』より)



## 山晴れて春色に紫く

(山口郡高がだんだんよくなって春のようにになってきた)

昭和9年、三井相懇会は農村復興事業の一環として、青森県東津軽郡西平内村に毎年一万円の援助と新傳員を常駐することにより、この地域復興の一翼を担った。当時三井相懇会の理事長だった米山は自らも現地へ赴き、私財も投じて積極的に支援した。その努力が結実し村は復興、これを喜んだ米山が「山晴れて」を題詞にして地元の方分者に送った。その後、遺族がこの副題の米久保存を願ひ、米山記念館に保存されることとなった。西平内村には、昭和15年、村民が感謝の気持ちを形にした記念碑(米山碑)が建立されている。

## ご入金 ご寄付のお願い

平成10年に完成した米山梅吉記念館新館の運営は皆様からの寄付により行われています。基本経費として米山奨学会や近隣地区によるご寄付、米館時のスマイルをはじめ周年事業寄付等様々な形でのご支援をいただいておりますが、主に2つの緊急運動によっています。まず一つに全国一人100円募金運動があります。これは「100円の短い糸が鎖と全国を結ぶ」を合い言葉に平成12年から始まった運動です。今年度上半期の入金状況は下表のようになっております。

全国100円募金入金表						
平成17年7月～12月現在						
地区	RC数	地区名	地区名	RC数	地区名	口数
2900	08	北海道東部	愛媛・香川・徳島・高知	73		7
2910	72	北海道西部	兵庫	74		12
2920	90	岩手・宮城	岡山・鳥取・島根	67		13
2930	63	徳島	福岡・佐賀・長崎	59		5
2940	43	秋田	広島・山口	74		11
2950	50	新潟	熊本・大分	75		7
2960	56	新潟	鹿児島・宮崎	64		2
2970	56	埼玉西北	長崎・佐賀	58		2
2980	72	東京・神奈川	鹿児島・宮崎・大分	90		2
2990	63	神奈川	鹿児島・宮崎・大分	80		10
2990	58	長野	埼玉南東	84		10
2990	65	富山・石川	神奈川	69		6
2990	84	静岡・山梨	千葉	85		13
2990	80	岐阜・三重	山形	57		3
2990	76	大阪府南部・和歌山	茨城	59		2
2990	94	福井・滋賀・京都・奈良	青森	43		2
2990	86	大阪府北部	群馬	47		2
RC総数 2324				口数合計 176口	合計金額 889,011円	

もう一つ一つの運動に賛助会があります。これは自主的な善意によりお願いしているもので、会費はお一人一口3000円です。今年度上半期は、93口273,000円の入金を頂きました。前年に比べると、少々苦戦中。賛助会にご入金していただくこと年2回発行の報章を個人的にお届けすることが出来ます。ぜひこの機会に賛助会にご入金ください。よろしくお願いいたします。

どちらの募金もクラブ単位、地区単位、個人いずれの形でもご入金でも結構です。今後の館の発展運営に対する自発努力の必要性は関係者一同痛感している所ではございますが、叱咤激励と共に皆様のご理解ご協力をよろしくお願い申し上げます。

●申し込み、振り込み先  
 郵便振替口座番号 00620-4-57730  
 振込人 米山梅吉記念館

## 米山梅吉記念館春季例祭のお知らせ

日時 平成18年4月29日(祝) 午後2時～

場所 米山梅吉記念館

新館三島駅より タクシー5分 東名沼津ICより 自動車 30分

内容 演劇 講演 アトラクション 懇親会 懇親会 講演 谷内宮文氏「米山梅吉と三井相懇会」  
 今年は、明治後90年にあたりです。講演者谷内宮文氏はロータリー米山記念奨学会監事、『点描 米山梅吉』の著者です。元三井信託銀行の副社長をつとめられた谷内氏から三井信託の初代社長、そしてロータリーアソシエーションの先輩としての梅吉翁について興味深いお話が聞けるものと思ひます。多くの皆様のご来館をお待ち申し上げます。



**米山梅吉記念館より60分**

**天城山に佇む**

**米山梅吉翁ゆかりの宿**

**落合楼村上**

伊豆天城湯ヶ島温泉  
落合楼村上  
〒410-0320  
静岡県伊豆市湯ヶ島1887-1  
電話 0555-885-0014

<http://www.ochiairou.com>

ご家族旅行、慰安旅行、などにもどうぞご利用ください。昼のご会食も承ります。

### 米山梅吉記念館のご案内

#### 開館時間

午前10時～午後5時（但し11月～3月は  
午後4時まで）

#### 休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日



### 米山梅吉記念館報

Vol. 7

発行日 平成18年3月20日  
 発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 内藤成雄  
 〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1  
 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101  
 印刷 フタバ印刷株式会社